様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００８０８

研究課題名（和文）第二言語における項省略の習得

研究課題名（英文）Acquisition of argument ellipsis in second language

研究代表者
山田　一美（Yamada, Kazumi）

関西学院大学・工学部・教授

研究者番号：９０４３５３０５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本語の項削除の解釈に焦点をあて、英語あるいはスペイン語を母語とする日本語学習者、日本語を母語とする英語学習者、韓国語母語話者から、先行研究で使用されたタスクを改良し、新たに追実験も実施して各言語話者の言語知識がより確実に反映された言語データを収集できた。項削除の習得と喪失の双方向から検証を行い、各言語母語話者の持つ文法における言語間作用を統語レベルで分析した。その結果、日本語学習者は母語の影響により項削除を習得できない一方、英語学習者は喪失が可能なことが確認され、韓国語母語話者は日本語学習環境やインプットの影響により、母語にはない解釈を韓国語の項削除に許容することが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、先行研究で得られた第二言語における項削除習得の言語データ結果を検証するため、実験文を改良し、追実験を実施することで、項削除に特有の緩やかな同一性解釈をより正確に分析する手法を構築した。この分析手法をもとに、項削除の習得と喪失の観点からも検証し、習得過程で母語の影響および発達段階を確認できた。さらに、日本語と同様に東アジア言語であり項削除を持つ韓国語についても、項削除に関する多くの研究が緩やかな同一性解釈に着目する中で、厳密な同一性の解釈の観点から項削除の解釈を分析し、韓国語母語話者の項削除の解釈が日本語のインプット量や学習環境により変化することを明らかにできたことにも意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this study, having Argument Ellipsis as object of study, linguistic data was obtained from English and Spanish native speakers learning Japanese, together with Japanese native speakers learning English, as well as Korean native speakers. This was carried out by developing tasks used in previous studies and follow-up studies newly created for this purpose, thus enhancing the the capacity to infer the linguistic knowledge of native speakers of each language. Both acquisition and unlearning of Argument Ellipsis were investigated and cross-linguistic influence was analyzed at the syntactic level. Results demonstrate that the two groups of learners of Japanese cannot acquire Argument Ellipsis due to the influence of their first language, while Japanese learners of English are capable of unlearning Argument Ellipsis. Moreover, it was revealed that Korean native speakers allowed Korean null arguments to have a new interpretation in a case where formal teaching and more input are provided.

研究分野：第二言語習得

キーワード：項削除　緩やかな同一性解釈　厳密な同一性解釈　英語母語話者の日本語学習者　スペイン語母語話者の日本語学習者　L1喪失　日本語母語話者の英語学習者　韓国語母語話者

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究では、空項の解釈に焦点をあて、第二言語（L2）習得過程に及ぼす母語の影響と習得過程を明らかにする。日本語はコンテクストから意味が明らかであれば主語や目的語を省略できる。これらの日本語の空項の統語的なステイタスは、言語理論の発展により項削除であることが明らかになっている（Oku 1997, Saito 2007, Takahashi 2008 他）。さらに、項削除に特有の緩やかな同一性解釈は、日本語が一致素性を持たないことに起因すると主張されている（Saito 2007）。

生成文法理論の枠組みとする第二言語習得研究では、項削除に関する研究があまりなされていない。数少ない先行研究では、母語に一致素性を持つ（英語、スペイン語）L2 日本語学習者が、習熟度がかなり進んでも、空項に厳密な同一性解釈のみを許容し、緩やかな同一性解釈を許容できないことが明らかになっている（Yamada & Miyamoto 2017）。この結果は、項削除の習得が困難なことを示している。しかし一方で、L2 学習者の項削除の習得ならびに喪失が、空項の先行詞の種類に影響される予備実験結果が得られている。これまでの研究成果の妥当性を検証するため、L2 学習者の言語知識をより正確に反映するデータを収集することが求められている。

２．研究の目的

先行研究の成果の妥当性を検証するため、以下をふまえて実証研究を行った。

（１）緩やかな同一性解釈を許す空項の先行詞として再帰代名詞「自分の～」に加えて相互代名詞「お互いの～」（Takahashi 2016）を含めた実験文およびコンテクストを作成した。

（２）緩やかな同一性解釈をテストする実験文に他の解釈の可能性（不定の解釈）が出ないよう、実験文を肯定文ではなく否定文にして、緩やかな同一性解釈のみが可能なテストを作成した。

（３）L2 学習者の空項の解釈をより詳しく調べるため、本実験に加えて追実験を実施した。

当初の計画では空項の先行詞として数量詞も考慮していたが、計画を変更して、広くデータを収集するよりも、興味深い結果が得られた相互代名詞のデータを掘り下げて分析することとした。さらに、韓国語の項削除が日本語とはわずかに異なる性質を持つことが報告されており、経験的事実を確認し考察することで、日本語以外の東アジア言語における項削除の理解を深めた。

３．研究の方法

（１）本実験

２つのテストを用いて実験を行った。１つはスクリーニングタスクで学習者の目標言語（日本語）の言語知識が空項を許容するかどうかを確認するためのテストである。許容した学習者の結果のみが考察の対象となる。2 つ目は L2 学習者の項削除の習得と喪失を検証するための真偽値判断タスクである。実験アイテムは以下のとおり（例：相互代名詞を先行詞とする空目的語を含む実験アイテム）。4 枚のパワーポイントのスライドの中で、写真と会話文を使ってコンテクストを設定し、5 枚目のコンテクストの内容を尋ねる実験文を提示した。

1.	2.	3.	4.
ネズミ：はいチーズ。 **リス**：　え？もう撮ったの？ぼくへんな顔しちゃったよ。	**ネズミ**：　かわいく撮ってね。 **リス**：　分かったよ。はい、チーズ。	**青ネコ**：　やあウサギさん、ぼくの写真を見てくれる？ **ウサギ**：私の写真も見てくれる？	**青ネコ**：わあ、うさぎさんきれいだね。 **ウサギ**：青ネコさんはかっこいいね！
5.実験文 ネズミとリスはお互いの写真を撮った。青ネコとウサギは見なかった。 True　or　False　（True は緩やかな同一性解釈　　False は厳密な同一性解釈）			

（２）追実験

項削除に特有の緩やかな同一性解釈に関わる本実験での結果をもとに、メールやインタビューをとおして、該当する L2 学習者に実験で使用したスライドや実験文を再度提示しながら彼らの解釈について質問をした。

４．研究成果

（１）L1 英語/スペイン語 L2 日本語学習者の項削除の習得

空項（空主語、空目的語）の先行詞が再帰代名詞の場合の緩やかな同一性解釈の許容率は、先行詞が相互代名詞の場合の許容率とほぼ同様であった。そのため、先行研究では検証されていない、空項の先行詞が相互代名詞の場合の調査結果を主に報告する。

参加者

	人数	年齢	日本語レベル			日本語学習開始年齢
			日能検	CEFR	人数	
英語母語話者	19 名	18-28 （平均 20.1）	N2 N3 N4	B1 A2 A1	11 名 6 名 2 名	13-26 (平均 18.6)
スペイン語母語話者	24 名	20-27 (平均 22)	N2 N3 N4 N5	B1 A2 A1-2 A1	1 名 10 名 9 名 4 名	15-21 (平均 18.3)
統制群	6 名		-	-	-	-

空目的語を許容した学習者数（スクリーニングテスト）

		0/3 回	1/3 回	2/3 回	3/3 回
英語母語話者	19 名	0	0	1	18
スペイン語母語話者	24 名	0	0	6	18

許容率

		相互代名詞の先行詞	
		緩やかな同一性解釈	厳密な同一性解釈
英語母語話者	19 名	57.9%	93.0%
スペイン語母語話者	24 名	66.7%	90.3%
統制群	6 名	72.0%	94.4%

緩やかな同一性解釈の許容率の内訳

		0/3 回	1/3 回	2/3 回	3/3 回
英語母語話者	19 名	3	6	3	7
スペイン語母語話者	24 名	2	4	10	8
統制群	6 名	0	2	1	3

スクリーニングタスクでは、すべての学習者が L２日本語で空項を許容したため、本実験の真偽値判断タスクの分析の対象とした。本実験の結果は、英語母語話者が 57.9%、スペイン語母語話者が 66.7%、緩やかな同一性解釈を許容した。その解釈の内訳は、英語母語話者では 19 名中 10 名が 3 つの緩やかな同一性解釈の文脈で２回以上、同解釈を許容した。一方、英語母語話者は 24 名中 18 名であった。

彼らが日本人統制群のように同解釈を許容しているのかどうか確認するために追実験を行った。結果は、英語母語話者たちにとって、（登場する動物や人物の）行動や感情自体が、空目的語自体の解釈よりも重要であり、目的語が何であるのか分からかったが、（登場する動物や人物が）行動をしたのかどうか（例：写真を見たのかどうか）にしたがって判断したという結果が得られた。つまり、英語母語話者は空目的語に緩やかな同一性解釈を許容していないことが明らかになった。一方、スペイン語母語話者は日本語母語話者と同じように緩やかな同一性解釈をしていることが明らかになった。

以上の結果から、英語母語話者は L1 のφ素性を保持していると考えられる。しかしスペイン語母語話者は偶然にも緩やかな同一性解釈を許容していた。日本語レベルに関わらず彼らが同解釈をしていることから、L1 のφ素性を保持していないわけではなく、むしろ L2 に転移している可能性がある。Otaki（2014）を採用した Yamada and Miyamoto（2017）によれば、スペイン語母語話者が、スペイン語の接語と同様に、日本語の格助詞 K（あるいは KP）をφ素性一致に必要な解釈不可能な格素性の場所とみなしているため、その結果、緩やかな同一性解釈を許容したことが主張されている。

本研究では、実験文を否定文にした上で、先行詞が相互代名詞の場合の空項の解釈を検証し、さらに追実験も含めたことで、より正確にＬ２学習者の空項の解釈を示すことができた。本研究結果は、再帰代名詞を先行詞とする空項のみが検証され、実験文も肯定文を使用した Yamada and Miyamoto（2017）の結果を、より正確なデータをもって支持している。また、L2 習得モデルの発展への寄与という点では、L2 学習者が L1 の解釈不可能なφ素性を喪失できないことを示す本研究の結果は、L2 学習者が L1 にはない L2 の解釈不可能なφ素性を習得できないと主張する Representational Deficit Hypothesis (Hawking & Hattori 2006, Tsimpli & Dimitrakopoulou)

を直接は支持しないものの、解釈不可能なφ素性が L2 学習者にとって問題であるという点で同じ見解を持つと言える。

（２）L1 日本語 L2 英語学習者の項削除の喪失
先行詞が再帰代名詞の場合と、先行研究では検証されていない相互代名詞の場合で、緩やかな同一性解釈の許容率に差があることが明らかになった。この興味深い結果が得られた空目的語の解釈のデータを掘り下げて分析することにした。2 件の研究成果が得られ、はじめに L2 英語の習熟度が空項の解釈にどのように影響するのかを検証した研究、次に上位習熟度レベルの学習者の L2 英語の空項の統語ステイタスの可能性を示唆した研究を報告する。

① 習熟度別の空項の解釈
本研究では先行詞の再帰代名詞を代名詞的な要素と解釈して分析を行った。
参加者

グループ	人数	CEFR*
中級（下）学習者	31 名	B1
初級学習者	15 名	A2

*TOEIC および TOEFL のスコアあるいは英検の結果をもとにグループ分けをした。

許容率

		代名詞的要素の先行詞（his own NP）		相互代名詞の先行詞（each other’s NP）	
		厳密な同一性解釈の文脈	緩やかな同一解釈の文脈	厳密な同一性解釈の文脈	緩やかな同一解釈の文脈
中級（下）学習者	31 名	85.5%	71.1%	93.5%	71.0%
初級学習者	15 名	90.0%	53.3%	96.7%	83.3%

グループ内比較では、初級学習者グループで２つの先行詞の場合の緩やかな同一性解釈の許容率にわずかな有意差（p=.070）がみられ、代名詞的な要素が先行詞の場合に厳密な同一性解釈をより許容したことが明らかになった。また、学習者が厳密な同一性の解釈の文脈で正しく空目的語を解釈した全体の許容率は 91.4%、緩やかな同一性解釈の文脈では 69.7%であった。
もし学習者の L2 英語の空項の統語ステイタスが項削除であるとすれば、空目的語に先行詞文の目的語（代名詞的な要素 *his own*）がコピーされるが、初級学習者はメタ言語的なストラテジーを採用し（Otaki 2018）日本語で「彼の」と訳した可能性がある。「彼」は同じ文の主語から局所的に束縛をされず、代わりに先行詞文の主語を指示した結果、厳密な同一性解釈が得られたと考えられる。相互代名詞が先行詞の場合に緩やかな同一性解釈をより許容した理由も同様で、初級学習者は空目的語に先行詞文の each other’s を「お互いの」と訳し「お互いの」は同じ節内に先行詞をとるため、緩やかな同一性性解釈が得られたと考えられる。しかし、日本語の空項の解釈については、先行研究でも実施した追実験でも、代名詞的要素が先行詞の場合は緩やかな同一性解釈が厳密な同一性解釈よりも許容される結果であった。したがって、彼らのＬ２英語の空項はＬ１の空項とは異なるものである。一方、中級学習者については空項の許容率をふまえ L1 からの転移と考える必要は必ずしもない。スクリーニングテストでは初級学習者よりも空項の許容率が低かった。

L2 英語の空目的語の許容率

グループ	人数	CEFR	すべての空目的語を許容した%
中級（下）学習者	31 名	B1	22.6%
初級学習者	15 名	A2	40.0%

空目的語の解釈は習熟度が進むにつれて変化していくと考えられ、それは先行詞のタイプによる可能性がある。空目的語を喪失していく過程は習熟度のある時点でみられると言える。

② 中級レベルの学習者の空項の解釈
本研究では学習者がどの時点で空目的語を喪失するのか検証するために、習熟度が進んだ中級レベルのデータを新たに収集し、統制群データも収集して分析をした。上記の研究と同じ実験アイテムを使用したにも関わらず、相互代名詞が先行詞の場合の緩やかな同一性解釈の許容率については、再帰代名詞が先行詞の場合よりも低い結果が得られた。

参加者

	人数	年齢	英語レベル		
			TOEIC	英検	CEFR
日本語母語話者	19 名	19-21（平均 20.1）	550－765	２級	B1

空項を許容した学習者数（スクリーニングテスト）

	人数	0/3 回	1/3 回	2/3 回	3/3 回
日本語母語話者	19 名	0	8	7	4
統制群	8 名	8	0	0	0

許容率

	人数	相互代名詞の先行詞		再帰代名詞の先行詞	
		緩やか	厳密	緩やか	厳密
英語母語話者	19 名	57.9%	94.7%	73.7%	89.4%
統制群	8 名	12.5%	4.2%	16.7%	0%

1 つ以上の文脈で厳密な同一性解釈を確実に許容した（3/3 回）学習者の回答の内訳

	相互代名詞の先行詞		再帰代名詞の先行詞	
	厳密な同一性解釈の文脈	緩やかな同一性解釈の文脈	厳密な同一性解釈の文脈	緩やかな同一性解釈の文脈
学習者 7	✢	✢	✔	✢
学習者 10	✔	✢	✔	✢
学習者 11	✔	✔	✔	✢
学習者 14	✔	✔	✢	✢
学習者 17	✔	✔	✔	✔
学習者 19	✔	✔	✔	✔

（✢1～２回の許容、✔確実な許容 3 回）

本研究の結果から、先行詞が相互代名詞の場合にのみ、緩やかな同一性解釈と厳密な同一性解釈の許容率に統計的な差異が確認された（p<.05）。また、19 名中 2 名（学習者 17 および 19）がすべての文脈で厳密な同一性解釈のみを許容し、緩やかな同一性解釈を全く許容しなかった。

相互代名詞の先行詞の場合に厳密な同一性解釈がより許容されたのは「お互い」の統語構造 [$_{NP}$ *pro*$_i$ [$_N$ *otagai*]] (Hoji 2006)に起因すると考えられる。つまり「お互い」と先行詞の関係が、「お互い」NP の中の *pro* とその *pro* の先行詞とみなされなければならないことになる。Hoji の分析によれば「お互い」はその先行詞の局所領域にある必要がなく、「お互い」NP の *pro* の先行詞は同一指示のために *pro* を C 統御する必要はない。本研究の結果と照らし合わせれば、[$_{NP}$ *pro*$_i$ [$_N$ *otagai*]]が代名詞[them]として解釈されたことになる。また、緩やかな同一性解釈を全く許容しなかった 2 名については L2 英語で項削除を喪失していると考えられる。一方で、空項は許容しているため、この点について彼らの言語知識は日本語であるとも英語であるとも言えず、むしろスペイン語の空目的語（[+限定, +特定]）(Campos 1986; Masullo 2003)のように解釈をしているように見受けられる。

（３）韓国語母語話者の項削除の解釈

多くの項削除に関する理論的な研究が緩やかな厳密な同一性解釈を中心になされている中で、本研究は厳密な同一性解釈に焦点を当てた点で新規性のある貴重な研究である。

項削除を持つ韓国語の母語話者を対象に、空項の先行詞が相互代名詞 *selo* の場合の解釈についてインフォーマントワークを実施した結果、韓国語の項削除は日本語とは異なる部分があるという経験的な事実が得られた。厳密な同一性解釈を許容しなかった韓国語母語話者グループ A は自然環境で日本語を学んだ、もしくは全く日本語に触れていないが、グループ B は教室内で日本語を学び、日本の滞在期間が平均 4.5 年であった。したがって、L1 喪失の可能性が考えられる。*Selo* が代名詞的要素でないならば、日本語の[$_{NP}$ *pro*$_i$ [$_N$ *otagai*]]のように NP 内に *pro* がないことになる。*Selo* を項削除と考えれば、厳密な同一性解釈は vehicle change 形式替え（Fiengo and May 1994）で説明ができ、*selo* を先行詞とする空項と形式替えが可能な形式は 3 人称複数代名詞であると考えられるが、グループ A の解釈ではその 2 つの形式の間で指標が異なると言える。

韓国語の項削除の解釈の結果

	人数	緩やかな同一性解釈	厳密な同一性解釈
韓国語母語話者グループ A	3 名	可能	不可能
韓国語母語話者グループ B	4 名	可能	可能

（４）生成文法のアプローチによる SLA 研究の基盤である統語論について、削除現象とそれに関連するテーマで 11 回の研究会を開催した。主なテーマは以下のとおり。

・There is something missing in NP and moving DP
・Focus movement approach to bare wh-stripping in Japanese
・Gaps that do not sprout
・中国語を母語とする日本語学習者の中間言語における演算子の性質について

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 Kazumi Yamada, Nobuo Ignacio Lopez-Sako, Mika Kizu, Cristobal Lozano	４．巻 41
２．論文標題 L2 Acquisition of Reciprocal Pronouns in Japanese Ellipsis by English and Spanish Speakers	５．発行年 2024年
３．雑誌名 JELS	６．最初と最後の頁 78～87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Kazumi Yamada, Nobuo Ignacio Lopez-Sako, Mika Kizu, Cristobal Lozano	４．巻 22
２．論文標題 Ellipsis Interpretations in L2 Japanese by Spanish Learners	５．発行年 2023年
３．雑誌名 言語と文化 Language and Culture	６．最初と最後の頁 45～56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Kazumi Yamada and Mika Kizu	４．巻 25
２．論文標題 A Study of Reciprocal Pronoun Ellipsis in L2 English	５．発行年 2022年
３．雑誌名 言語と文化	６．最初と最後の頁 47～63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yoichi Miyamoto and Kazumi Yamada	４．巻 36 (2)
２．論文標題 On null arguments and phi-features in second language acquisition	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Journal of Japanese Linguistics	６．最初と最後の頁 179～223
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/jjl-2020-2024	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yoichi Miyamoto and Kazumi Yamada	4．巻 1(2)
2．論文標題 On the Interpretation of Null Arguments in L2 Japanese by L1 German Speakers	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Journal of Monolingual and Bilingual Speech	6．最初と最後の頁 312～332
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kazumi Yamada	4．巻 24
2．論文標題 Language Transfer in the Interpretation of Null Arguments in L3 German	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Kwansei Gakuin University Humanities Review	6．最初と最後の頁 107～118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Mika Kizu and Kazumi Yamada	4．巻 37
2．論文標題 Notes on Reciprocals in Korean and Japanese Ellipsis	5．発行年 2020年
3．雑誌名 JELS	6．最初と最後の頁 197～203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Kazumi Yamada	4．巻 23
2．論文標題 Null Arguments in Intermediate L3 German :The Role of L1	5．発行年 2020年
3．雑誌名 言語と文化	6．最初と最後の頁 35～48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yoichi Miyamoto and Kazumi Yamada	４．巻 36
２．論文標題 On Null Arguments and Phi-features in Second Language Acquisition	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Journal of Japanese Linguistics	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　1件／うち国際学会　9件）

１．発表者名 Kazumi Yamada, Nobuo Ignacio Lopez-Sako, Mika Kizu, Cristobal Lozano
２．発表標題 L2 Acquisition of Reciprocal Pronouns in Japanese Ellipsis by English and Spanish Speakers
３．学会等名 日本英語学会　第41回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Kazumi Yamada, Nobuo Ignacio Lopez-Sako, Mika Kizu, Cristobal Lozano
２．発表標題 Ellipsis Interpretations in L2 Japanese by Spanish Learners
３．学会等名 The 22nd International Conference of the Japan Second Language Association (J-SLA2022)（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Mika Kizu and Kazumi Yamada
２．発表標題 The Development of L2 English Learners' Interlanguage: Toward the unlearning of null objects
３．学会等名 The Japanese Society for Language Sciences 22nd Annual International Conference (JSLS2021)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kazumi Yamada and Mika Kizu
２．発表標題 L2 Acquisition of Reciprocal Reading in Japanese Ellipsis
３．学会等名 International Symposium on Bilingualism ISB13（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kazumi Yamada and Mika Kizu
２．発表標題 A Study of Reciprocal Pronoun Ellipsis in L2 English
３．学会等名 日本第二言語習得学会設立20周年記念国際大会（2020年度年次大会）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Mika Kizu and Kazumi Yamada
２．発表標題 The development of L2 English Learners’ Interlanguage: Toward the unlearning of null objects
３．学会等名 The 21st Annual International Conference of the Japanese Society for Language Sciences（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Mika Kizu and Kazumi Yamada
２．発表標題 Notes on Reciprocals in Korean and Japanese Ellipsis
３．学会等名 The English Linguistic Sociey of Japan (ELSJ) 12th International Spring Forum 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kazumi Yamada, Mika Kizu
２．発表標題 Availability of the reciprocal reading in L2 Japanese
３．学会等名 The 14th Generative Approaches to Language Acquisition conference (GALA 14)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kazumi Yamada
２．発表標題 Accounting for article interpretation in L2 English by L1 Japanese adult and child learners
３．学会等名 2018 年度 J-SLA 秋の研修会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kazumi Yamada, Yoichi Miyamoto
２．発表標題 Accounting for null aralulent interpretation in L2/L3German by speakers of English and Japanese
３．学会等名 Generative Approaches to Language Acquisition in North America (GALANA)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kazumi Yamada, Yoichi Miyamoto
２．発表標題 On the interpretation of null argllnlents in L2 Japanese by German speakers
３．学会等名 Linguistics Association of Great Britain (LAGB)（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

1．著者名 宮本陽一・山田一美	4．発行年 2020年
2．出版社 くろしお出版	5．総ページ数 220
3．書名 第7章　第三言語における非顕在的な項の獲得：日本人スペイン語学習者のL3文法を例に（pp.177-220）『第二言語習得研究モノグラフシリーズ４　第二言語習得研究の波及効果‐コアグラマーから発話まで‐（白畑知彦・須田孝司編）	

1．著者名 木津弥佳	4．発行年 2020年
2．出版社 くろしお出版	5．総ページ数 220
3．書名 第3章　日本語の主節現象に関する第二言語習得研究（pp.57-86）『第二言語習得研究モノグラフシリーズ４　第二言語習得研究の波及効果‐コアグラマーから発話まで‐（白畑知彦・須田孝司編）	

1．著者名 Yoichi Miyamoto and Kazumi Yamada	4．発行年 2018年
2．出版社 ISMBS	5．総ページ数 325
3．書名 On the Development of L3 Spanish in the Grammar of L1 Japanese Learners with L2 English, Crosslinguistic Research in Monolingual and Bilingual Speech	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	木津　弥佳（田中） (Kizu Mika) (00759037)	ノートルダム清心女子大学・文学部・教授 (35305)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	ロペズ　サコ　ノブオ　イグナシオ (Lopez-Sako Nobuo Ignacio)	University of Granada・Associate Professor	
研究協力者	ロザノ　クリストバル (Lozano Cristobal)	University of Granada・Associate Professor	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
スペイン	University of Granada			